

# 第4回サツマイモ基腐病の現状と対応に関する 情報交換会（R4.12.20）のレポート

（一財）いも類振興会需要促進部長  
（日本いも類研究会事務局長）

なかざわ たてお  
中澤 健雄

## 1. 概況

平成30年に国内で初めて発生が確認され、南九州で猛威を振っていたサツマイモ基腐病は、令和2年には九州各県のほか高知県、静岡県、令和3年7月には関東の茨城県、千葉県、8月後半には北海道と発生地域が全国に拡大している。（令和4年12月までに30都道府県で発生が報告）

このため、令和3年度には3回の情報交換会を開催し、発生生態と防除対策に関する情報を共有したが、令和4年度においては、本年度における発生状況や対策の実施状況と効果等について12月20日に情報交換会を開催した。会議は令和3年度に引き続き、Zoomウェビナーによるオンライン開催で実施し、鹿児島県、宮崎県、徳島県、茨城県、千葉県、北海道を中心に全国から200名以上の参加があった。

### ●開催概要

日時：令和4年12月20日（火）13：30～15：30

場所：Zoom ウェビナーによるオンライン開催

主催：日本いも類研究会、日本かんしょ輸出促進協議会、（一財）いも類振興会

参加者：主催団体の会員の他、前回参加者へのメールや日本いも類研究会ホームページで告知

進行：座長：日本いも類研究会会長

小巻克巳

パネリスト：九州、関東のJAや生産・加工・流通に携わる法人の担当者、研究機関や行政の担当者等

## 2. 情報交換会の内容

会議の開催にあたって、当日の座長をお願いした日本いも類研究会の小巻会長からは、昨年につき第4回目の開催となるが、200人以上の方に参加いただいたのは、サツマイモ基腐病がまだ深刻な問題であることの証しであり、病気の発生がかなり少なくなってきたのは、この病害について生産者の方々がよく理解してきたからであるが、きちんと対策を継続する必要がある、との挨拶があった。

### （1）パネラーからの報告

#### ① 本年の栽培概要

今年のサツマイモ基腐病の発生は、これまで激発していた南九州の鹿児島県や宮崎県において、前年に比べると大きく減少した。要因としては、農研機構が本年4月に公表した「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策標準作業手順書」（以下、作業手順書という。）で、これまでの研究成果を育苗から採苗・植付、栽培

管理、収穫・残渣処理、種イモの選別・貯蔵、圃場管理の項目ごとに適切な技術指針を示し、サツマイモ生産関係者のよき手引きとなったことがあげられる。

それと、今年、被害が少なかったのは、梅雨が短く降雨量が少なかったことによるところが大であり、9月以降は台風の被害により、基腐病が発生した畑が見られたものの、塊根の腐れまではなかった。早期の掘り取り、防除の徹底、作型の早期化に取り組んだ結果である。生産者が以下のように、防除対策として基本的な作業である「持ち込まない」、「増やさない」、「残さない」という活動をきちんと行ったことによるものである。

#### 【持ち込まない】

- ・種いもの消毒はもとより、茎頂培養をした苗をほ場に植えるなど対策を取った。
- ・種いもの蒸熱処理は、令和3年度には種いものを腐敗させてしまった例があった。本年は温度条件等について、庫内温度48℃、湿度95%、処理時間100分以内という処理で効果が認められた。こうした蒸熱処理装置を補助事業で導入する農家も多い。
- ・種いものを薬液浸漬処理した地域では効果が上がっている。

#### 【増やさない】

- ・初期の防除を徹底した。ドローンによる農薬散布についても植付後生育の初期段階で行うことにより、株元まで農薬がかかるので効果があることが判明した。
- ・病株の抜き取りと薬剤散布とを一緒にやると非常に効果的である。
- ・植付直前の忙しい時期ではあるが、耕盤

層を壊して、ほ場の排水を良好にすることにより、基腐病の発生を少なくした例も報告された。

- ・基腐病菌は胞子が水とともに移動拡大することから、降雨によっても、ほ場が湛水状態ならないことは大切な防除対策となる。

#### 【残さない】

- ・栽培残渣のほ場外への持ち出しと適切な処理は関東の産地を含めて、いずれの産地においても実行されており効果をあげている。
- ・ただし、対策を講じていない、あるいはこれまでと同じ品種を作付けしているほ場では、基腐病は年々増えており、昨年と比べて5割くらい基腐病の発生が増えているケースもある。
- ・関東の産地では、基腐病と疑われるようなほ場発生例が10数件あったが、検査の結果いずれも基腐病ではないことが判明した。

#### ②抵抗性品種の効果

蒸熱処理による種いもの消毒や茎頂培養苗の使用などによる初期の発生を防いだこともあるが、さらに、抵抗性の品種の導入による効果が大きかったことが報告された。

抵抗性品種として確認されている「こないしん」「みちしずく」は実際にはほ場で栽培検証も行われた「みちしずく」はコガネセンガンと比べると健全いもの割合が高く、9月収穫では90%が健全いものであった。今後、焼酎原料用として2028年までに2000haの栽培面積を見込んでいく。育成中の系統としては「べにはる

---

か」の子供である九州201号が基腐病に強い。美味しくて形も良いが、肉色が白っぽくて黄色が薄いのが難点である。まだ、系統なのでできるだけ早く品種化した。

従来品種では「べにはるか」より基腐病に強いとされている「べにまさり」に栽培を切り替えた地域もあり、本年は天候がよかったことに加えて、「べにまさり」の強さもあって、基腐病の発生が押さえられた。早掘り用の品種として「あまはづき」が注目されているが、貯蔵性に難があるとの指摘が出ている。種苗メーカーのパネリストからは、簡易試験として8寸のポットに培養苗を植付けて基腐れ病菌を接種した結果、コガネセンガンが弱いことが確認でき、タマアカネなどオレンジ系は比較的強く、「すずほっくり」も基腐病に強いとの報告があった。

### ③今後の課題

今年は天候がよくて梅雨も短く、台風の影響も少なかったが、9月に台風14号が九州を通過した後に基腐病の発生が見られた地域もあった。このため、降雨量が多い年には基腐病の発生が広がる恐れがある。また、既存品種の「コガネセンガン」を中心に栽培している圃場では病害防除を通常どおりに行っても被害は発生しており、今後は排水処理、ドローンによる広域防除等を徹底することの必要性が指摘された。

同様に、種子島では基腐病に対する抵抗性が強くない「安納いも」が主体の経営が行われていることから、今後、新しいコンソーシアムで防除対策を含めた試験研究を行うこととしていることが報告された。

基腐病に比較的強い「べにまさり」を導入した産地では、「べにはるか」や「シルクスweet」と比べると価格が低いことが課題となっている。九州201号など新しい品種系統は市場や消費者の評価がまだ得られていないことから、導入に対する不安もあるとの声もあった。また、民間で育成した品種についても国の研究機関の育成品種と同様に基腐病の検定が必要との意見もあり、共同研究等の対応を今後検討することとされた。

## (2) 農林水産省におけるサツマイモ基腐病対策

農林水産省農産局地域作物課から、令和4年産においてサツマイモ基腐病の被害が発生した地域において、令和5年産への影響を最小限にしながらかんしょの持続的な生産を図るための取組に対して支援を行うこと、令和4年度補正予算事業の補助事業申請期限は令和5年1月13日となっていることなどについて説明が行われた。

<https://www.maff.go.jp/j/seisan/tokusan/kansho/attach/pdf/motogusare-7.pdf>